

一緒にオナニー



触らないで言っただのに

しませんか

二角レンチ

体験版

R-18

目次

告白できないならオナニーね	3
大事なところを見られる	12
巨乳でパイズリ	20
原作利用権について	25
プリンタでの印刷方法	27
奥付	28

告白できないならオナニーね

放課後。私は自分の部屋でお茶を飲みながらいつものように友達に困らせられていた。

「だからあ、いいかげん告白しなっ」

「で、でも、できないよ。そんなの無理。それに、告白はやっぱり男の子からじゃないと」

「夢見すぎだって。向こうはあんたのこと何とも思っていないよ。話もしないただのクラスメイト。それでいつどうして告白してくれるってえの」

「それは、やっぱり、言わなくても私の気持ちに気づいてくれるとか、実は私のことが気になっているとか」

「だからそんなの無いって。何のアピールもしないのに振り向いてくれるどころか気づいてもくれないって」

私は黙る。お茶を飲もうとしてカップが空になっているのに気づく。彼女がさりげなくポットから注いでくれた。口は悪いくせによく気がつく。

私は彼女に頭が上がらない。私も気の強いほうだが彼女に対してだけは強くでられない。

彼女は私の親友だ。髪が長くてさらさらしている。私みたいにくせ毛ではない。うらやましい。私だってあんなにまっすぐできめ細かい髪なら絶対のばすのに。私は首までしか髪をのばせない。それ以上は広がってみっともなくなってしまう。しばっても変だし編むのはいやだ。

彼女はすごく美人だ。メガネが似合っている。とても知的に見える。

本当に頭がよいのだが、より賢そうに見えるというだけでメガネをかけている。ファッションとしてメガネをかける人は多い。でも私がかけると逆に馬鹿っぽくなるのはなぜだろう。

彼女はあらゆる点で私に勝っている。親友で、いつも一緒にいる。でもだからこそ、常にコンプレックスにさいなまれてきた。背の高さだけでなく、大きな胸でさえ彼女にはかなわない。なのに手首や腰は私より細い。足も長くてモデルみたいだ。反則だ。

こんな何もかも私より勝っている女がそばにいるせいで、私は自分に自信が持てない。彼女は告白すれば絶対男はオーケーするって言うけれど、そんな自信はまったくない。

それにたしかに、彼女の言うとおりで。私の好きな人はクラスメイトで、ろくに話をしたこともない。向こうが私のことを気にかけているそぶりはまったくない。なのに好きになってもらおうというのはあまりに無理のある話だった。

「男なんてさあ、エッチしたくてたまらないんだからさ、抱かせてあげるって言えばすぐにつきあってくれるって」

「そんなこと言えるわけないでしょ」

彼女はすごくモテる。なのに男の告白をいつも断る。私なんて一度も告白されたことなんてないのに。

「男はみんなこれ目当てで寄ってくるの。うんざり。うっとおしい」

彼女は自分の大きすぎる乳房を下から持ち上げ弾ませる。私だって大きいのに。彼女のとなりにいるせいで私のおっぱいはまるで男の子の目に入らなかった。

「私さあ、男に抱かれるのいやなんだよねえ。男のおもちゃにされるなんてまっぴらごめんよ。男をおもちゃにしたいの。なのに寄ってくる男はみんな好き勝手に私を犯したがつている」

「それって自慢？」

「そうだよ。あんたに自慢するの楽しいもの。モテない女はいやだねえ。あらこわい顔。いつ見てもおもしろい。飽きないわあ」

彼女はいつも私を馬鹿にする。私が彼女にコンプレックスを持っているのを知っていて刺激してくる。

なんでこんなのと親友なんだろう。でも嫌いになれない。小さい頃からずっと一緒に、いつもからかわれたり意地悪されたりしてきた。それでもたくさん助けてくれた。私が辛いときに支えてくれた。さびしいときいつもそばにいてくれた。だから大好き。ずっと親友でいたい。

「男はエッチなことしか頭に無いんだからさあ。身体を使って告白すれば絶対つきあってくれるって」

「そんなこと出来るわけないでしょ。セ、セックスってすごく痛いんでしょ。怖い。そんなのできない」

「でもつきあったらさあ。絶対セックスしたがるよ。しないで我慢させるなんて無理だよ。デートもそこそこにセックスばかりするようになるよ」

「彼はそんなことないよ」

「あはは。夢見すぎだって。あいつあんたと同じでモテないでしょ。彼女できたらやりまくるに決まっているじゃない」

私の好きな男の子。本当にモテないのかどうかは知らない。でも女の子はみんなあれは無いわと言う。

別にブサイクなわけではない。逆だ。顔がとてがかawaiiの。女の子みたいにきれいでかawaii顔をしている。身体も細いしなよなよしている。

男らしさのかけらもない。あんなの一緒に歩いても弟かと思われる。同じ歳なのに年下に見える。友達に彼氏として紹介できない。自慢できない。

女の子はみんなそう言う。私はそうは思わないけれど、もしつきあったらみんなにそういつてからかわれる。私が告白できないのは勇気がないからだが、あれこれ言われるはめになるのがいやだというのも理由のひとつだった。

彼とセックスかあ。セックスにはすごく興味がある。この歳で興味が無い子はほとんどいないし、したくない子もほとんどいない。

でもやっぱり怖い。経験した友達の多くがとて痛かったと言っている。痛くない子や血の出ない子もけっこういるのだが、やっぱりすごく痛かったとかたくさん血が出てシーツが真っ赤になったとか聞くとそればかり印象に強く残る。

セックスは怖い。まだしたくない。男の子とつきあっている友達の多くが、彼氏が猿みたいにしょっちゅう求めてくるって言う。断ってもやめずに押し倒してくる。だから女の子たちは、ゴムつけて避妊をきっちりすることを条件にさせてあげている。

上手い彼氏ならちゃんと気持ちよくしてもらえる。気遣ってくれる。やさしくしてくれる。でも下手な彼氏はもう自分のことばかり。セックスで女を気持ちよくしてくれず、ただ何回も飽きるまで射精を繰り返すだけらしい。

友達の多くが、彼氏はセックスが下手で気持ちよくなれないと言っている。オナニーのほうがましらしい。

私はセックスは気持ちいいものだという幻想を抱いているが、そんな話を聞くとやっぱりするのが怖いと思う。

彼はたぶんセックスが下手だろう。彼とセックスしたらはじめはすごく痛くて、そのあとも気持ちよくなって、なんてとてもいやだ。

「プラトニックなつきあいとか、駄目かなあ」

「駄目駄目。無理だって。毎日オナニーしまくっている男が、彼女できたらエッチなことせずにいられるわけないって」

「そんなにするものなの？」

「するする。毎日二回も三回も射精してるよ」

「ん、でも、そんなのわからないでしょ」

「んー、他の男は知らないけどね、うちの弟は毎日何回もするよ」

「え、なんで知ってるの」

「壁薄いから。ベッドきしませてはあはあ言いながらしてるし。イくときうっとかカエルを絞め殺したみたいな声出すもの。それを連続で五回も六回もするのよ。早いしさあ。毎日よ」

「毎日聞いているの？」

「たいていはね。私それをオカズにオナニーするし」

「そ、そうなんだ」

彼女はエッチなことをあっけらかんと話す。他の人にはここまで言わない。私と二人きりのときだけだ。私が顔を真っ赤にしながら、でも興味津々で聞くのがおもしろいらしい。

「男のオナニーっていいよねえ。はあはあって息すごく荒いしさあ。あんなにぎしぎしベッドきしませて、どうやってるんだろう。見たいなあ」

「み、見たいものかなあ」

「見たいって。絶対見たい。あんたもでしょ。正直に言いなさい。もしうちの弟のオナニー見せてあげるって言ったら見たいでしょ」

「え、見せてくれるの」

「ぷっ。あはは。そんな身を乗り出さなくても」

顔が熱くなる。私は浮かせてしまったお尻をすたとんと下ろして縮こまる。

「いやー、そっかそっか。そんなに見たいかあ」

「な、なによ。そっちだって見たいんでしょ」

「見たい見たい。すごく見たい」

「う、私も、すごく見たいけど」

「でしょ。でしょ」

「ん、お、弟さんの、本当に、見せてくれるの？」

「それよりさあ。もっと見たいのがあるんじゃないの」

今度は彼女が身を乗り出してくる。私の顔の前でにんまり笑う。

意地悪い笑いだ。口の端まで三日月のように歪んでいる。彼女がこういう笑い方をするときほろくなことがない。いつも私をそそのかして、ひどい目にあって、私は泣いて彼女はそれを見て大笑いするのだ。

それでもいつも、わくわくドキドキする、断れないような魅力的な提案をしてくるのだ。だからいつもひどい目に遭うとわかっていても、私はつい話に乗ってしまう。

「み、見たいのって何かなあ」

本当にわからない。話の口振りから、弟さんのオナニーを見せてくれるのかと思った。男の子のオナニーを見られるならぜひ見たい。彼女の弟さんは私の好きな人ほどではないがかわいい顔をしている。私はかわいい男の子が好きだ。女の子の服を着せて抱きしめたいとか思ってしまう。

「絶対見たがるってえ。絶対」

「本当に、見当もつかないんだけど。何」

「愛しの彼のオナニー、見たくない？」

顔が噴火する。湯気が出る。真っ赤に煮えたぎる。脳まで茹でられ思考が止まる。

「え、え、え、え」

「見たいでしょ。想像してごらん」

言われるままに想像してしまう。かわいい彼が顔を赤くしてもじもじしている。裸で、股間を手で隠している。

その手をそっとどけるとかわいいペニスがぴこんと勃っている。彼はそれを指でつまんで小刻みに動かす。

「ほらあ。想像するといやらしいでしょ。彼がかわいい顔のくせに大人顔負けの凶悪極太ペニスを両手でつかんでぐいんぐいんしごいてるところ」

「やめてよ！ 彼のがそんな、ご、極太なんて、変な想像しないで」

「いやいや、ああいうのはねえ。ペニス大きいよ。ほら顔がかわいいほどペニスが大きいって言うじゃない」

「それを言うなら鼻が大きいほどでしょ。しかも迷信だし」

私はむくれる。想像とは言え彼を汚された。あんな天使みたいにかわいい顔の男の子に、大きなペニスがついているはずがない。きっととても小さくてかわいらしいに違いない。

「いやいや。私さあ。やっぱりペニスは大きいのがいいねえ。初めては筋肉モリモリの大男に極太ガチガチ棍棒を根本まで突っ込まれてガンガン犯されるのが夢だからさあ」

また言っている。彼女はいつもこういうことを言う。ビデオでたまに見る、大きなたくましい男にのしかかられて激しく犯されるのが好きらしい。

それはあくまで見るときだけだ。実際に、それも初めてがそんなの痛くて怖くて耐えられない。彼女はそう言っているだけで、実際にそんなことは望んでいないと思う。私がセックスを怖がっているからわざとひどいセックスを話しておもしろがっているだけだ。

「彼のオナニー、見たいでしょ。だからね。見せてってたのもうよ」

「はあ？ そんなの、見せてくれるわけじゃないじゃない」

「そりゃただでは見せてくれないわよ」

「じゃあどうするのよ」

「聞きたい？ 聞きたい？」

彼女は口に手を当てて笑っている。目がとてもスケベそうに歪んでいる。

「もったいぶらないで」

「あんたもオナニー見せてあげるのよ」

一瞬、世界が真っ白になる。

すぐに気を取り戻す。私は手をあわあわと振りながらうろたえる。

「そ、そんなの、見せられるわけじゃないでしょ」

「向こうに見せてもらおうって思ったらさあ。こっちも見せてあげないとね」

「も、もう。またからかって。そんなことまでして見たくないわよ」

「まあまあ。これはあんたのためを思って言ってあげているのよ」

「何がよ」

「だからあ。彼のことが好きなんですよ。でも告白できない。彼に告白してももらえない。何とも思われてないもの。まずは気を引かなきゃね」

「でも、オナニー見せるってのはいくらなんでも」

「違う違う。本題はそこじゃないの」

「何」

「あんたセックス怖いんですよ。でも男の子はセックスしたがるよ。女の子とエッチなことしたくてたまらないもの。あんたと仲良くなったとしたら、絶対エッチをしたがるよ」

「そんなの、わからないわよ」

「オナニーを見せ合うですよ。男の子は興奮して射精する。それですっきり。でもあんたは触られない。ちょっと恥ずかしいけれど、触られないなら押し倒されもしないわ」

「でも、そんなことしたら、興奮して襲ってくるかも」

「あれ。さっきと言ってることが違うじゃない。彼はエッチをしてこないんじゃないの」

口をつぐむ。たしかに、やっぱり男の子はエッチをしたがるだろう。彼はそんなことしないと思いたいけれど、そうとは限らない。

「じゃあやっぱり、オナニー見せ合いなんて危ないじゃない。無理よ」

「だから、私がついてあげるって」

「は？」

「私も一緒にオナニーするの。相手は男とはいえ貧弱だからね。女二人なら襲ってきても対抗できるでしょ」

「一緒になって、それはちょっと」

「もし一人が襲われたらさあ、もう一人が後ろから蹴り上げてやるの。潰さない程度にね。すごく痛いらしいよ。男なら軽く叩いただけでも気絶しそうになるんだって」

「ちょっと、彼の大事なところを蹴るなんて許さないわよ」

「子供作れなくなると将来困るものねえ。ね。二人なら安全ですよ。男がいくらスケベでセックスしたがってもさあ、こっちが二人なら手を出せないって」

たしかにそうかもしれない。ん。でも何か引っかかる。

「そっちが男のオナニー見たいだけなんじゃないの」

「んふふ。それもあるけど。男に見られながらするのも気持ちいいかなって」

「変態」

彼女はまだ処女のくせにエッチなことが大好きだ。男が襲ってくると思っているから性欲丸出しで告白してくるのをすべて断っている。でも私の好きな彼のように、おとなしい相手ならいいように遊べると思っているらしい。

「大事なことよ。悪い話じゃないわ。男の気を引くにはエッチなことをさせないといけない。男はスケベだからね。でもセックスはいや。フェラとかしてあげたらそれでは済まないわよ。すぐにセックスまでされちゃうわ」

「フェ、フェラとかできないし。私は、彼と清いつきあいがしたいの」

「だから無理だって。男は我慢できないし。あんたも彼のエッチなところ見たいでしょ」

たしかに見たい。すごく見たい。エッチするのは怖いけれど、興味は人一倍強い。

「だからオナニー。エッチ未満。触らない。触らせない。安全で、でもエッチな欲望を満たしてあげられる」

何かおかしい気がするが反論できない。どこがどうおかしいのだろう。彼女の屁理屈にいつも言いくるめられてしまう。

「彼の気を引くにはエッチなことが欠かせない。でもエッチは怖い。だからオナニーを見せ合う。こっちは二人。安全で、彼の性欲を解消できて、しかも親密になれる」

たしかに親密にはなれる。オナニーを見せ合うなんてすごいことだ。だれよりも親密な関係だと言える。

「そうしてるうちにさあ。だんだんあんたのことを好きになってもらうの。でもエッチしたいときはオナニーを見せ合って解消してあげる。そうすればあんたは怖いセックスをせずに彼とつきあえるようになるってわけ」

そんなにうまくいくのだろうか。というより好きな人を落とすのにオナニーを見せ合うなんて聞いたこともない。

「別にいいんだよ。他に手があるならさあ。彼に押し倒されて犯されずに親密になれる手が他にあるならさあ」

そんな手が無いから相談しているのに。何度もしつこく相談して、いいかげんうんざりされているのだろうか。だから解決策として、こんなとんでもないことを提案したのだろうか。

「それとも、ずっと片思いのままているの？ 告白できないエッチもできないあんたが好きになってもらえる可能性なんか無いよ。片思いのままいずれ卒業して、一生後悔し続けることになってもいいの？」

そんなのいやだ。彼と絶対恋人になりたい。

彼女はそのあともべらべらと理屈をこねたりおどしたりした。私はいつものように、どこかおかしいと思いながらもうまく反論出来ず、だんだん言いくるめられていった。

このあとは彼を二人で誘い一緒にオナニーします。でも興奮した若い男女がそれだけで終わるわけもなく、どんどんエッチはエスカレートしていきます。

体験版では以下でエッチシーンの一部をごらんいただけます。

大事なところを見られる

彼があそこを見せろと言う。女の子の一番恥ずかしいところ。一番いやらしいところ。

たしかに、オナニーを見せ合うのだからそこも見られるのは覚悟していた。でもいざとなるとやっぱり恥ずかしい。

彼はまるで萎えない、むしろますます元気になっているペニスをしごいている。射精したのに元気すぎる。

そういえば、彼は一日五回もオナニーしていると言っていた。一回ぐらいではまるで足りないのだろう。

彼がにじり寄ってくる。私は座ったまま後ろ手であとずさりする。ベッドに背が当たる。もう逃げられない。

「見せて。早く。僕だって女の子の见たい。僕だけ見られてずるい」
どうしよう。怖い。彼はなんだかすごく強引だ。有無を言わせず威圧してくる。

なのにペニスから目が離せない。太いペニスをぐいぐいしごいているのいやらしすぎる。精液が少し先についていて、そこだけ肉の濃い色と違ってやたら目立つ。

きっと私のあそこも、彼の目にはこれぐらいいやらしく見える。異性の性器はとてもしゃらしい。生々しい。それを見られるなんて恥ずかしすぎる。

「見せてあげなよ。彼見たがっているよ」

横を向く。彼女は胸の精液をティッシュで拭き取っていた。

「あんたが見せないなら私が見せてあげようか」

彼がぐいんと彼女のほうを見る。ひどい。見られるなら誰のでもいいんだ。私のじゃなくてもいいんだ。

「見せてくれるの？」

「もちろん。ちょっと待っててね」

彼女は精液を拭き取ったティッシュをゴミ箱に捨てる。そしてベッドに手をついて上がった。

「ほらあ。もっと近くへ来て」

彼女は股間を手で隠し、そのうでをむっちりしたふとももで挟んでいた。ベッドに座り、彼を誘惑する。

彼はそそくさと四つん這いでベッドに近寄る。まだ隠された股間を食い入るように凝視する。

「本当に見せちゃうの。そんな。恥ずかしくないの」

「恥ずかしいわよ。でも彼見たがってるし。私も見せてもらったんだからおあいこ」

彼は四つん這いのままのぞき込む。口を開けてはっはっ息を切らせている。

「あはは。犬みたい。君本当にいいわあ。さっきの射精とか、今の性欲の塊みたいな意地汚さとか。最高」

ひどいことを言う。でも彼は気にしていないみたいだ。

「犬みたいかあ。ねえ、本当に犬にしてあげようか」

「え？」

「犬みたいに、べろべろなめるの。できる？ 犬なんだから手使っちゃ駄目よ。四つん這いで、舌を出してなめるの」

「ちょっと、何言ってるのよ！」

頭に血が上る。言うにことかいて、犬だなんて。彼を犬扱いしようとする。許せない。

それに、見せるだけのはずなのに。触ったら駄目なはずなのに。触ったらもう我慢できない。今の興奮した彼はもう止まらなくなる。だから触らせないことにしようって決めていたはずなのに。

「やめてよ。彼を犬扱いしないで。彼に手を出さないで」

「私は手を出さないよ。彼が手、いや、舌を出すだけ。手は出さない。くくく」

「やめて。いやよ。許さない」

「許さないって何。決めるのは彼よ。私は無理強いしていないわ」

私は彼をじっと見る。彼は私をじっと見る。彼がなめるわけがない。犬みたいに股に顔を突っ込んでなめるなんて、そんなみじめなことするわけがない。

「僕なめたい」

私の思いはまるで通じない。彼はとてもいやらしい顔をして女のあそこをなめたがった。

「ほらあ。彼はなめたい。私はなめられたい。誰も困らないじゃない」

「そんなの駄目よ。絶対駄目。だって。だって」

「あんた何様よ。何の権利があってそんなこと言うわけ」

「け、権利って。だって。わ、私の気持ち、知ってるくせに」

「そうだっけ？」

「こんなときに、意地悪言わないで」

泣きそうになる。何がどうなっているんだ。彼女はいつも意地悪で、いやなことでもするけれど、あくまで冗談の範囲で、笑って済む範囲で。

こんな。しゃれにならない。冗談では済まない。どうしてこんな。ひどいこと。

「彼の恋人に言われるならともかくさあ。彼となんの関係も無いあんたが、私と彼をどうこう言う権利は無いんじゃない？」

「そんな。う。でも」

「でもじゃないわよ。いやなら彼と恋人になれば？ そうしたら私はおとなしく帰るよ」

「う。ひっく。何、言ってるのお」

「彼に告白して、恋人になって、セックスすればいいじゃない。裸で二人きりにしてあげる。好きなだけ彼に犯されなさい」

セックスは怖い。痛い。今の彼は性欲が強い。興奮しすぎている。そんな彼とセックスなんてできない。痛くても血が出ても絶対やめてくれない。

それに、そもそも告白できないからこんなことをしているのに。そんなこと彼の前で言うなんて。

彼を見る。今のやりとりで私の気持ちはばれているのだろうか。彼の様子からはわからない。彼はただじろじろと、私たちを欲望の煮えたぎった恐ろしい目で眺めている。

怖い。こんな彼と二人きりになって、無事に済むわけがない。

「い、いや、いやあ。絶対いや」

私はぼろぼろ泣きながら拒否する。ひどい。どうしてこんなに私を困らせるのだろう。

「はっ。痛いからセックスしたくない？ そんなの言い訳にもならないわ。そんなの好きって言えないわ」

彼女が彼のほうを向く。

「私、彼とセックスしたい。だからきっと、私の方が彼のことを好きってことよね」

頭に大岩が落ちてきたようだ。激しい衝撃に息が詰まる。

何。今、何て言ったの？

「男の子ってすごいねえ。ペニスがたくましい。性欲が底無し。一回射精してもまるで足りてないみたい。まだまだ出せそう。いやらしすぎる。もうたまらない」

彼と彼女が見つめ合う。いや。そんなことしないで。

「もうしたくてしたくてたまらない。あんたがしないなら私がする。私が彼とセックスする」

私は金魚のようにぱくぱく口を動かす。声が出ない。文句を言えない。

「痛くてもさあ、怖くてもさあ、したくてたまらない。我慢できない。これってさあ、痛いのがいやだからって彼に我慢させるあんたよりも、私のほうが彼のこと好きってことだよね」

彼女がベッドの上から彼に顔を近づける。彼も彼女に顔を近づける。

「さすがに恋愛感情まではいかないわあ。だれかさんに悪いしねえ。私は身体だけの関係でいいわあ」

彼女が彼の唇をくすぐるように自分の唇でこする。彼もつられてこすっている。

そんな。彼は、経験が無くて、だから、大事な、ファーストキスのはずなのに。

「私の言うことちゃんと聞ける？ そうしたら、気持ちいいこととしてあげる」

彼は目をとろんと伏せ気味にしながら、こくこくと何度もうなずいた。

「じゃあまずはなめて。さっき言ったように、手を使わないで、舌だけでなめるの。いいわね」

彼の返事を待たずに、彼女は唇を押しつけた。

「あ、ん、む、ちゅ」

二人とも頭をゆすりながら何度もキスをする。口が離れたときに舌が見える。差し込んでいる。なめまわしている。からませている。ベッドの上から首をのぼす彼女と、ベッドの下から首をのぼす彼が、激しいキスをしている。

「いやあああああああ」

私はもう耐えられなくて泣き崩れた。

「うっうっ。どうして。ひどいよお」

私の泣き言が聞こえていないのか、それとも無視しているのか。二人とも私がいなかったかのように激しく互いを貪り合った。

「キスってこんなに気持ちいいんだあ。はああ。知らなかったあ。今まで男の告白断っていたの、もったいなかったなあ」

彼女は舌なめずりをする。その口周りにはよだれでべちょべちょだった。

「はあ。はあ。じゃあおまちかね。見るの初めてでしょ。見て。奥まで見て」

彼女がベッドの上に寝ころぶ。足を大きく開いて股間の肉を手で広げる。

「うわあ。すごい」

彼がベッドにがっとう寄り、顔を近づけてのぞき込む。

彼女のそこはとてもきれいだった。厚ぼったい肉を左右に広げると、中の薄い桜色が丸見えになる。ぐっしょり濡れた粘膜はぬらぬらと光って妖艶だった。

「はああ。いい匂い」

彼が鼻の下をのぼして顔を近づける。本当に犬みたいにくんくん匂いを嗅いでいる。

「はあ。ふう。男の子に見られている。すごく恥ずかしい。でも見られるだけで興奮する」

彼がぬろりと舌を出す。飢えた野良犬のようにぎらつくまなざしで彼女を見上げる。

「うふふ。よく我慢したわね。いいわよ。なめて。犬みたいに、いや、犬になりなさい。私の犬にしてあげる。いいでしょ。ちゃんと言ったこと聞いたらくさんご褒美あげる」

彼は返事代わりに猛烈な勢いでむしゃぶりついた。

「は。は。あむ。んぐ、ちゅ。じゅるるる」

「あはあ。吸ってる。なめてる。はああ。これいい。ものすごく気持ちいい」

彼女が仰け反る。さっきまでの余裕がみじんもない。シーツをつかみ、頭を振って悶えている。

そんなに気持ちいいんだ。私は嫉妬と怒りと悲しみの中に、熱い羨望がわき出てくるのをはつきり感じた。

「んああ、これすごい。はあ。くうう。んん。舌、すごいのお。やわらかくて、熱くて、ぬめぬめして。あん。あはあ。何これ。指より、道具より、気持ちいい。ローターとか、はあ、比べ物にならない」

彼女はよく、ローターとかバイブとかあてがってオナニーしている。その振動がすごくいいって言っていたのに。それよりはるかにすごいらしい。どんな気持ちよさなんだろう。うらやましい。

私は、彼女に裏切られ、彼を取られて、なのに興奮している。いや、むしろだからこそ興奮するのか。

愛しの彼が、目の前で、親友に奪われている。二人とももう私のことなんか気にしていない。いるかどうかもわからないのではないだろうか。

どうして。狂おしいほどの嫉妬の炎が、羨望と欲望に火をつける。こんなひどい光景を見て、悲しいのに、くやしいのに、腹が立つのに、泣いて歯ぎしりしているのに。

股間がうずく。胸がうずく。私は二人の痴態を見ながら濡れて待ちかねたそこをいじり始めた。

「んん。これ。んう」

すごい快感が走る。さっき彼のペニスを見ながらしたより何倍も気持ちいい。

どろどろに濡れている。どうして。どうしてここまで興奮するのだろうか。

好きな人を目の前で寝取られる。私はまだそれを理解していない。でも身体はその禁断の麻薬に快感を覚え始めていた。

一度はまったらやめられない。辛いほど気持ちいい。嫉妬するほど気持ちいい。狂おしいほど悶え感じる。その快感を私の身体は知ってしまった。

「あはあ。はあ。ああ」

私は激しく胸をもみしだき、股間をいじりこねる。ぐちょぐちょと指を入れてかきまわす。指を曲げて入れる分には奥まで届かない。痛くない。快感だけを貪れる。私はよだれを垂らし、ぎらぎらとさまざまな感情を強烈に宿しながら二人をにらみ続けた。

「はあ。ああ。んあああ。はああああ」

彼女はベッドに寝ころび悶えまくっている。彼は頭を彼女の股間につっこみ、その足を手で広げながら貪っていた。

「指、指、入れて、いいですか」

「ん、駄目、よ。舌だけ。もっとなめなさい」

「はい、いくらでもなめます。んじゅる。んぐ。おいしい。はああ。おいしいいいい」

彼はわき出る汗をすすり飲んでいて。じゅるじゅると音を立てて吸い取ると、ごくりと音を立てて飲み下す。

「ん、はあ、それ、それええええ」

彼女が一際激しく悶える。なんだろう。

「舌、舌あ。はああ。入ってるううう。熱い。んんん。中で、動いてるう」

舌。舌を、入れているんだ。

はあ。それってどんなにすごいのだろう。うらやましい。くやしい。うらめしい。

私は知らず知らず二人に近づく。もっと目の前で見たい。止めたい気持ちが強いのに、それ以上に見たくてしょうがなかった。

「じゅぼ、じゅぶ、じゅる、じゅうううう」

「んはあああ、クリ、はあ。そこ駄目、そこ吸っちゃ駄目え」

「ここがいいんですか。もっと吸います。んぐ。ちゅうううう」

「ひいいいい、うう、駄目、もう、それしちゃ、駄目」

「もっとですか。こうですか。んじゅるるる」

「は、あ、は、唇で挟んで、吸うなんてえ。んは、あぐ、もう駄目、イク」

彼女の身体がびくびくふるえる。ベッドに押しつけながら背中を反らせる。

「あああ。あああぐ。ふああああああ」

彼女が身体を跳ねさせる。何度もがくがく跳ね回って、急に糸の切れた人形みたいに止まる。

いったんだ。彼になめられてイクなんて。どれほど気持ちいいんだろう。あんなの、オナニーであんなイキ方はしない。そこまで悶えるほど気持ちいい絶頂ってどんなだろう。

彼女はうまく息ができないようだ。何度も大きな胸を弾ませながら酸素を求めてかすれるようにあえいでいる。

「いったんだ。僕がなめて、イかせたんだ」

彼はなんだかとても感動しているようだ。彼女の肉門はぱっくり開いていた。中がひくひくとうごめいている。私はあまりのすごさにもうそばまできて見ていた。私もイきたい。なのに自分でいじってもイけない。

いつのまにか、近づきすぎていた。私の胸が彼のうでに当たる。彼はかなりおどろいて、私の方をぱっと振り向いた。

「あ」

彼と目が合う。彼の視線がじとりと落ちる。私が手でいじっている股間を見た。

「僕、なめるの上手いんだよ。ほら。女の子イかせたんだ。してあげる。気持ちよくイかせてあげる」

「え。やだ。ちょっと」

彼は私をベッドに押し上げ、足を両手で開かせた。

巨乳でパイズリ

私は快感の余韻にぐったりしていた。

男の子になめられるの気持ちよすぎる。舌があんなにぬめぬめと動き、中をはいずり回る。

何度もイカされた。テクなんてなくてもいい。ただ夢中で執拗にいくまでなめまわされればそれでイける。

気持ちよかったあ。

私が満足に浸っていると、彼が私のひざを手でつかんで広げた。

「ひ」

犯される。そう思うと一気に血の気が引いた。

「待ちなさいよ」

ペニスを真上に勃起させ、私にのしかかろうとしていた彼が声のした方へ振り返る。

「やってくれたわね。はあ。童貞のくせに。女二人イかせたからっていきがっているんじゃないわよ」

彼が私を離して彼女の方を向く。なんだか怒っているようだ。

「僕はすごいんだ。女をイかせることができるんだ。童貞だからって馬鹿にするな」

「へええ。調子にのっちゃって。くく。まあそれもおもしろいかもね」

二人はにらみ合う。なんでもいい。とにかく今すぐ犯されることだけは免れた。

「君が女をイかせたように、私だって男をイかせられるわよ。あっさりね。どう。試してみる？」

彼女が自慢の巨乳を手で持ち上げる。左右の乳房を交互に上下させ、なまめかしくもみしだく。

めいっぱい持ち上げて、乳首を上に向かせる。鋭く勃起したそれを、舌を出してちろちろなめる。

唇ではさんでひっばっては放す。すごい。乳首に口が届くんだ。私は届かないのに。彼女の大きさが心底うらやましかった。

彼はそのいやらしいショーに見とれていた。彼女がひくつくペニスを見ながらにんまり笑う。

「来なさい。このおっぱいで挟んであげる」

「う、あああ」

彼があわてるように急いで前に出る。彼女は大きなおっぱいを左右から押しつぶすように押さえながら彼を待つ。

大きな肉の狭間に大きな棒が押し込まれる。ずぶずぶとめりこんでいく。それはまるで膣に挿入しているかのようで、セックスみたいにいやらしかった。

「う、ううう。はあ。うあ」

彼が悶える。声を我慢できないようだ。

「あはは。全部入っちゃった」

彼の大きなペニスを根本まで包み込む巨乳。あらためて彼女の大きさを思い知らされる。

「ほらほら動かすよ。耐えてごらん。くすくす。何秒持つかな」

彼女は左右の乳房を互い違いに上下させる。おっぱいでサンドイッチされた具がたふたふとやわらかすぎる肉玉にこすられる。

「うはあ、うああ、あああく、ああうわ」

彼が背を仰け反らせる。たまらない気持ちよさらしい。

彼女は床にひざをついてパイズリしている。彼は背筋を反らせ、立ったまま上半身が悶え暴れる。

ひざががくがくふるえている。とてもみっともない。さっきまでいい気になっていたのがあっけなく砕かれる。

「ほらほらどうしたの？ ん？ さっきみたいにえらそうなこと言ってごらんなさいよ」

「ん、は、んく、これ、うは、あふ、だって、んあ」

「うふふ。かわいいの。男なんて女にかなうわけないんだから。おとなしく言うこと聞きなさい。ね」

「う、う、うう、う」

「ん。強情ねえ。くすくす。じゃあこれはどう」

さっきまでの上下にこするのから一転、彼女はおっぱいを手で固定したまま身体を前後させた。

太いペニスがにゆるると引き出される。亀頭だけが埋もれた状態から、一気に根本まで押し込まれる。

「うはああ、それ、それええ」

「セックスしてるみたいでしょ。私のおっぱいの中に射精していいからね」

本当にセックスみたいだ。ペニスが姿を見せては消えていく。大きなおっぱいがいやらしい性器になっている。彼の童貞ペニスをようしゃなくしごき飲み込む。

ぐちゅぐちゅといやらしい音がしている。彼の先走りや彼女の汗でその谷間はとても潤っているようだった。

ぬちゅ、ぐちゅ、じゅぶ、ぶちゅ。

いやらしい水音をたてながらパイズリをする。その様はとても圧巻で、私は目が離せなかった。

「ううう、ふうう、僕もう、僕もう」

「出して。いいよ。私のおっぱいに中出しして」

「ん、ん、ん、ん、出る、出る、出る出る出る出る、うわ、うわわ、わああ」

彼が腰を振る。彼女もタイミングを合わせて身体を前後させる。彼が突き出すときに彼女も前へ出る。おっぱいを使った激しいセックスを繰り広げる。

突然彼がぴたりと止まる。眉を歪めて一瞬こらえたあと、腰を勢いよく突き出し根本まで埋没させた。

「あああくあくうううううう」

彼が悶えながら絶叫した。背を仰け反らせ、目を瞑り、汗を吹き出している。

射精しているんだ。おっぱいの中に、射精している。

彼女はほほえみながら、やさしくおっぱいを上下させ搾り出してあげている。その姿は子供を慈しむ母親を思わせ美しかった。

「ん。熱い。あはあ。たくさん出てる」

とても幸せそうに笑う。女にとって男に射精してもらうのはとても幸せなことだ。彼女ばかりずるい。

「あ、あ、あうん、はうん」

彼が悶えながら腰を揺する。やわらかい乳に挟まれ押しつぶされながら最後の一滴まで絞り出す。

「ふふふ。たくさん出たねえ。うわあ。べとべと」

にゆるりとペニスを引き抜く。ペニスは精液まみれでぐちょぐちょだ。

彼女はおっぱいを広げて中に出された精液を見る。とろりと垂れてお腹を滴っていく。

大量に出ている。汚された彼女の汗ばんだ顔はとても色気が増していた。女は男とエッチするときれいになるって言うけれど本当だと思った。

「ペニスもどろどろねえ。ねえ、きれいにしてあげなよ」

彼女が私の方を見て言う。

「え、え、でも、そんな」

「口は無理？　じゃ、おっぱいでしてあげな。あんたもパイズリしてあげたいでしょ。射精させなくていいから、お掃除パイズリしてあげなよ」

そんなの聞いたことが無い。でもそれを聞いて、胸の奥が熱くうずいた。

彼もその気のようにだ。精液まみれの勃起ペニスを私に向けた。

ためらったけれど、でも私は彼に近づいた。ペニスがびくびくはねている。射精したのに元気なままだ。

さっきの彼女はきれいだった。うらやましかった。私も彼にしてあげたい。おっぱいで気持ちよくしてあげたい。

胸を持ち上げ、彼のを挟む。にゆるりと精液がつく。温かい。そのままぬぷりと挟み込む。

やっぱり、彼女のようにはいかない。肉をわきからうんと寄せてもペニスを包み切れない。どうしても亀頭が出てしまう。

それでもいい。私はおっぱいを両手で挟んで上下させた。

「ん、こ、こうかな」

「はあ。気持ちいい。その調子で続けて」

彼は射精直後の甘い余韻に浸っていた。いったあとは後戯が大事だ。彼の幸せそうなほほえみを見るとそれがよくわかる。

彼に喜んでもらえている。彼のことを好きだからか、それとも女だからか、男を喜ばすのがとても幸せなことに感じられた。

ぬちゅぬちゅとパイズリを続ける。すると精液が泡立ちやたら粘つくようになった。

「あー、こりゃ駄目だね。乾いてくると粘度が増すみたい。なんか汚らしいなあ。掃除になっていないね」

「そ、そっちがやれって言ったんでしょ」

「ああごめん。失敗みたい。やっぱりお掃除は、きれいにできるところでないとね」

彼女が舌を出していたずらっぽく笑う。どういう意味かわかるから顔が熱くなる。

「二人でお掃除してあげようよ。ね。彼をきれいにしてあげよう」

私は恥ずかしいけれど、それでも彼のためにしてあげたかった。だからこくりとうなずいた。

原作利用権について

原作利用権は、アイデアを原作として利用することができる権利です。

原作として利用するというのは、このアイデアをもとにしてあなた自身のアイデアで改変し、あなたが用意した絵などの素材で作品を作ることです。

漫画、小説、ゲーム、動画、絵本、演劇、映画などあらゆる作品の原作として使用できます。

アイデア以外の絵などの素材を利用することはできません。

例外として文章はアイデアそのものを述べたものであるため、必要に応じて一部あるいは大部分を使用することが出来ます。そっくりそのまま使うのではなく、あなた自身のアイデアで改変して使用してください。

本作品に収録されているすべてのアイデアは原作利用権付きです。

本作品を購入した人は誰でもそれを原作として、自由に改変した上で自分の作品を作ることができます。

体験版など無料で提供したものには原作利用権は付いていません。

原作として使用する際に一切の連絡、許諾、契約はいりません。

原作として使用する際は、原作者名を記載してください。原作、原案、アイデア提供など呼称は何でもかまいません。

原作：二角レンチ

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

原作、原作者および他のあらゆる人、物、団体等に対して貶める、損害や迷惑を与えるなどの行為を禁止します。

原作として使用することにより生じる一切の問題や損失、賠償等に対し原作者は責任を負いません。すべて自己責任で使用してください。

原作者はその原作を用いて作られた作品に対し、利用規定に反しない限り一切関与しません。作品内容に口を出すこともなければ、その作品から得た利益に対し分け前を要求するようなこともありません。

この原作は公開されたものです。そのため、未発表の作品のみを募集する賞などには使えません。

この原作はすべて自分で考えたオリジナルですが、既存の作品と似ていないという保証はありません。アイデアというのは世界中の誰かが同じことを考えているものであり、完全に誰のアイデアとも似ていないアイデアというのは存在しないためです。

原作の著作権を放棄しているわけではありません。この原作を使用して作った作品の著作権はその作成者にありますが、原作の著作権は原作者にあります。

二角レンチが作成、販売している原作利用権付き作品を購入した方は、同時に二角レンチのブログ「ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版」内の全ての作品についても原作利用権を有するものとします。

ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版

<http://stockstackstory.seesaa.net/>

プリンタでの印刷方法

この PDF は印刷して読みやすいようにデザインされています。

1. A4 コピー用紙を uses。
2. 印刷範囲で「すべて」または「ページ指定」をします。
3. 「両面で印刷」「綴じ方：左」で「小冊子の印刷」をします。
4. 両面印刷で一枚につき4 ページが印刷されます。
5. 中綴じ用ホチキスなどで綴じます。
6. 二つ折りにすると完成です。

A5 サイズで手軽に読みやすい文字サイズになっています。

(注：お手持ちのプリンタがこれらの機能に対応している場合に限りです)

印刷

プリンター

名前(N): Canon MG5200 series Printer プロパティ(P) ?

ステータス: 準備完了 注釈とフォーム(M):

種類: Canon MG5200 series Printer 文書と注釈

印刷範囲

すべて(A)

現在の表示範囲(V)

現在のページ(U)

ページ指定(G) 1 - 107

印刷指定: 範囲内のすべてのページ

逆順に印刷(E)

ページ処理

部数(C): 1 部単位で印刷(O)

ページの拡大 / 縮小: 小冊子の印刷

小冊子の印刷方法: 両面で印刷

開始ページ 1 終了ページ 27

ページを自動回転 綴じ方: 左

ファイルへ出力(F)

プレビュー: コンポジット

単位: ミリ

1/54 (1)

296.97

209.97

ページ設定(S)... 詳細設定(D) 注釈の一覧(U)

OK キャンセル

奥付

この内容を無断転載、複製して配布するなどの迷惑行為を禁止します。

この内容を閲覧、利用するなどして生じるあらゆる問題、損害等に関してこちらは一切の責任を持ちません。すべて自己責任で行ってください。

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

作品名

一緒にオナニーしませんか 体験版

発行日

2011年11月16日

著者

二角レンチ

ブログ・連絡先

<http://originalmagazine.seesaa.net/>